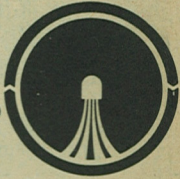


第13号

ほんきょうろ
本郷とは人類の本当の故郷(地上天国)
という意味です。従って、本郷路とは
地上天国実現のための道路です。
(題字は文鮮明師)



本郷路

昭和61年(1986年)1月1日発行

発行所 国際ハイウェイ建設事業団
東京都渋谷区道玄坂2-10-12
新大宗ビル3号館4F TEL 03(496)2893
THE INTERNATIONAL HIGHWAY CONSTRUCTION CORPORATION

日韓友好に大きな貢献を

日韓トンネル

韓国の協力訴える

日韓有識者の懇親会開催

韓国・ソウル

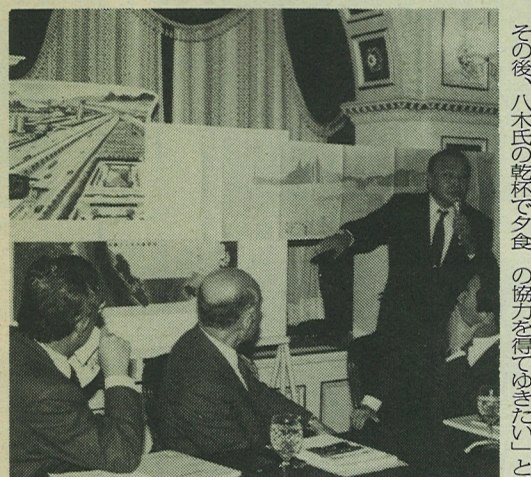
文鮮明師によって提唱された国際ハイウェイ構想の実現を目指し、日韓トンネル計画が日本
で急ぐに進められている中、日韓トンネル研究会会長・佐々保雄(北海道大学名誉教授)は、
十二月十七日、韓国ソウルのロッテホテルで、日本と韓国の有識者を集めて懇親会を開催した。
これは日韓トンネルプロジェクトをめぐる初の国際的会合であり、席上、同プロジェクトの概
要と日本の活動状況が報告された。その後、参加者は食事を交えながら交流を深め、友好的
な雰囲気の中で活発な意見が交換されていた。



韓国ソウルのロッテホテルで開かれた懇親会には日韓の有識者が多数参加した

韓国ソウルで開かれた日韓トンネル懇親会には、日本と韓国の地質・土木・建築関係の学者・技術者二十名が出席した。日本からは、佐々保雄会長はじめ辻田時美・北谷繁教授、八木信雄・財団法人文化協理理事長・持田豊・元鉄道文化協会理事長ら八名、韓国からは世界平和教授協会の李哲豪博士、同副会長の尹世元博士、金鳳均・ソウル大学教授ら十二名が参加した。

懇親会には、鄭昌熙・ソウル大学教授の司会が始まり、尹博士が挨拶に立った。博士は、日本側で進められている日韓トンネル計画の概要を紹介し、個人レベルで続いている韓国学識経験者によるトンネル研究会の交流の経過を報告した。そして対応が遅れている韓国側の意見を訴え、「実現のためには両国の協力が必須」と結んだ。次に佐々会長が挨拶に立ち、



日韓トンネル計画を説明する持田豊氏

日韓トンネル構想の成り立ちと研究会設立までの経緯を述べ、各部署の活動報告を行った。そして、「韓国側の協力を得てトンネル建設の道を開いてゆきたい」と、建設実現へ韓国側の協力を訴えた。その後、出席者の自己紹介が行われ、韓国側を代表して金鳳均教授が、八四年から八五年にかけて実施された巨済島の地質調査の概要を報告した。また日本側からは、持田氏が昨年三月に韓国へ行った際、日韓トンネルの現状と技術的問題点を説明していた。

その後、八木氏の乾杯で夕食の協力を得てゆきたい」と、感

文鮮明師によって提唱された日韓トンネル計画は、日本での積極的な研究活動と共に、韓国でも次第に大きな期待を受け始めている。日韓の新时代を迎えたいという現在の、未来に向けてこのプロジェクトがやがて両国友好のシンボルとして、大きな役割を担ってゆくことであろう。

賛同者メッセージ



私は、一九八一年ソウルで開催された国際科学者会議の席で、文鮮明師の国際ハイウェイ構想をうかがい、非常に感銘を受けました。私自身ロマンに生かされた人間的な人間であり、今日までいさかかロマンを持ってきた人間なので、その時、このように大きなロマンのモチベーションに燃え、その清らかな方、ロマンは必ずや実現する、と感じました。そ

ロマン実現して人類幸福に寄与

社日本工業技術振興協会会長 西堀栄三郎

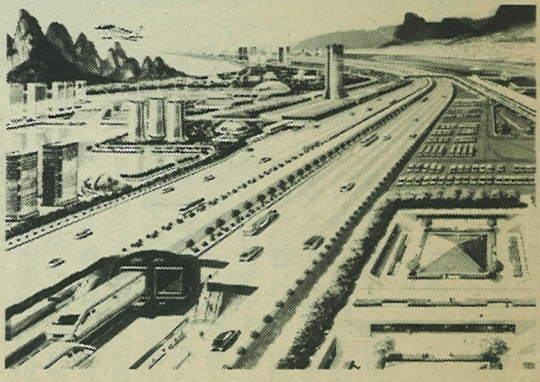
持つ、出来る限りの協力をし、てゆきたいと思っております。

現在、世界では、国々に別れて国境を争い、思想を争っています。人類が争いをやめて一つにならなければ、実現させなければならぬ大きなロマンです。そのための一つのアプローチが国際ハイウェイ構想であります。現在、その一環としての日韓トンネルの調査、研究活動が着々と進められています。私はこのプロジェクトが「意外に早く実現する」と思っております。

自由公路

交通公社の発表によると、年末年始の海外旅行者は、史上最高の二十六万八千人。また国内旅行では、三千万人が中心に、マイカーが五、四、一、〇で、利用交通機関のトップだった。この時期の交通機関は、首都圏を中心に毎年パンク状態だ。交通網の整備が急務である。現在、川崎市と木更津市を結ぶ東京湾横断道路計画が具体化してきた。民間主体で六十一年度から着手予定だ。また、明石と淡路島をつなぐ明石海峡大橋も六十一年度着手の見通しである。大型プロジェクト花盛りの年となった。一方欧州でも、英仏を結ぶユーロトンネルの実現が目前である。民間による建設・管理が、両国政府によって既に承認されている。八七年建設着手、九二年完成の予定だ。ナポレオンの夢が二百年後の今日実現しようとしている。夢が現実になる時代を迎えたよ。先月、文鮮明師の帰国歓迎晩餐会がソウルで開かれ、世界中から元大統領など著名人が駆けつけた。師は、各国の使命について提言を行っている。人口問題、資源問題をかかえた日本の進路について、「アジア共同体の推進と、中国を含む国際ハイウェイの建設にある」と述べた。一億国家間の人々が自国を愛する以上に他国を愛するようになれば、世界は一つになってゆくと師は語る。新年を迎えて、国際ハイウェイ建設の足音が一段と高まってゆくのを期待したい。

平和の架け橋・国際ハイウェイプロジェクト



- ご案内
ビデオ
「国際ハイウェイ」I (23分) [日・英語]
「道」国際ハイウェイプロジェクト (30分) [日・英語]
「本郷路」I (11分) [日・英語]
「本郷路」II (23分) [日・英語]
16ミリ
「道」国際ハイウェイプロジェクト (30分)
パンフレット
「国際ハイウェイプロジェクト」(A4判、12頁 カラー)
「国際ハイウェイ基本構想」(A4判変型、40頁)
「INTERNATIONAL HIGHWAY PROJECT」(B5判、17頁) [英語]
機関紙
「本郷路」(タブロイド判4頁)
お申し込みお問い合せ 03-496-2893
国際ハイウェイ建設事業団
THE INTERNATIONAL HIGHWAY CONSTRUCTION CORPORATION
〒150 東京都渋谷区道玄坂2-10-12
新大宗ビル3号館4F
TEL 03-496-2893

一年間の総括

ハイウェイ建設を通じ、人類の未来に理想社会を実現

文鮮明師の提唱による国際ハイウェイ建設も、早四年を経過した。その間、ハイウェイ構想の早期実現のため、第一段階として、日本と韓国を結ぶ日韓トンネル建設が着々と進められてきた。そして現在では、国内のみに留まらず、海外でも日韓トンネル計画が大きな注目を浴びてきている。

調査から設計段階へ

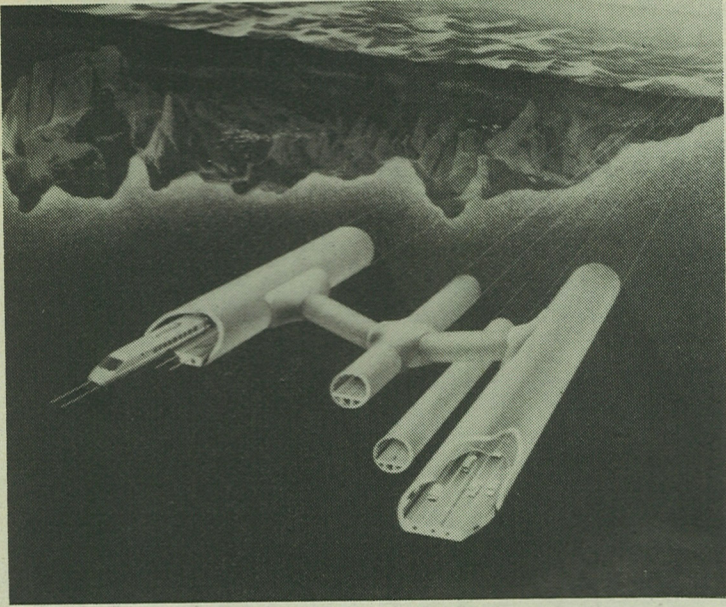
日韓トンネル、国際会議でも発表

「今後、米国の自由世界が日本への原料供給を歓迎しなされた場合、日本は中国を中心とする原料供給の道を求める必要に迫られるでしょう。その意味から、私は一九八八年、世界の先端技術の粋を集めた国際ハイウェイの建設計画を宣布しました。同計画は日本を大陸と連

結し、満州と西欧あるいはペリヤを連結することによって、自動的に原材料供給できる道を整えることを一つの目的としています。」(文鮮明 続けてきた)

師・八五年十二月、ソウル) 21世紀を間近に控えて、日本から開始される国際ハイウェイの意義は大きいといえる。八五年は、吉岐・対馬で陸上部深層ボーリング(吉岐四本、対馬二本)が八四年同様続けられ、海城部でも第三定安丸による第一ドレッジングが行われた。また唐津では、調査斜坑建設用の坑口設備工事が開始され、対馬でも立坑候補地の造成工事が急ピッチに進められた。更に、対馬厳原町小浦に微小地震計が設置され、対馬海峡全域の地震解明に大きな役割を果たしている。

日韓トンネル計画

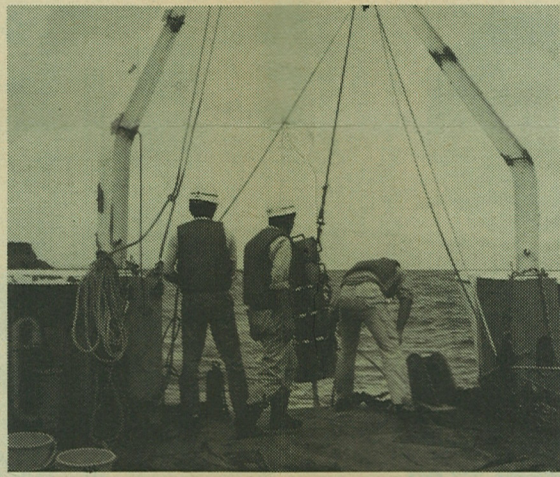


私は一つの提案をします。それは中国から韓国を通り日本に至るアジアハイウェイを建設し、ゆめゆめは、全世界に通じる「自由圏ハイウェイ」を建設することです。これは中国大陸から韓半島を縦断し、トンネルあるいは鉄橋で日本列島に連結して日本を縦断する一大国際ハイウェイで、ここでは自由が保障されるのです。(R・S・ムーン)

日韓トンネル実現へ調査進む

国際ハイウェイ事務所報告

海に陸に進む調査 調査斜坑建設へ準備完了



吉岐水道を中心に第一ドレッジングを実施した

唐津事務所

八二年夏に開設された唐津事務所は、事業団最初の現場事務所として主に、日韓ルート海域部の調査活動と調査斜坑建設の所になっていきます。ここで昨

一年間の活動を振り返ってみよう。膨大なデータを解析

当事務所は、第三定安丸を擁して海洋調査を続けています。冬になると対馬海峡は荒れ模様となり調査活動が困難になります。そこで冬期には、これまで三年間続けられてきた音波探査の膨大なデータ整理と解析作業が行われました。ここでは特に、オーストラリアから来日したウォルター博士が、これまでのデータをもとに海底断層の解明に取り組み、吉岐水道の断層図を作成するなど大きな成果をあげることができました。



斜坑予定地では造成工事が急ピッチで進められた

馬延局点の測量も行っています。海上での船の位置は、座標が確認されている従局点からの電波をキャッチして算定してゆきます。そのため新しい従局点

八月から九月にかけては、第一ドレッジングが吉岐水道を中心に繰り返されました。途中、台風に見舞われるなど悪条件の中で作業でしたが、海底の貴重な試料を数多く採取することができました。また、次回ドレッジングに備えて、対

斜坑建設の準備も

また八三年九月から、加唐島に験潮所を設置し管理を続けています。吉岐の郷・浦津と唐津湾に既設の験潮所があります。加唐島はその中間にあたり、貴重な潮汐データを捉えてい

今年度の事務所開設から四年を迎えますが、調査に建設にと昨年以上に忙し一年になると思われます。一日も早く日韓トンネル建設を開始してゆくと、所長以下職員一同張り切っています。(川瀬幸彦事務部長)

複雑な地層を掘る 岩石試験センターも充実

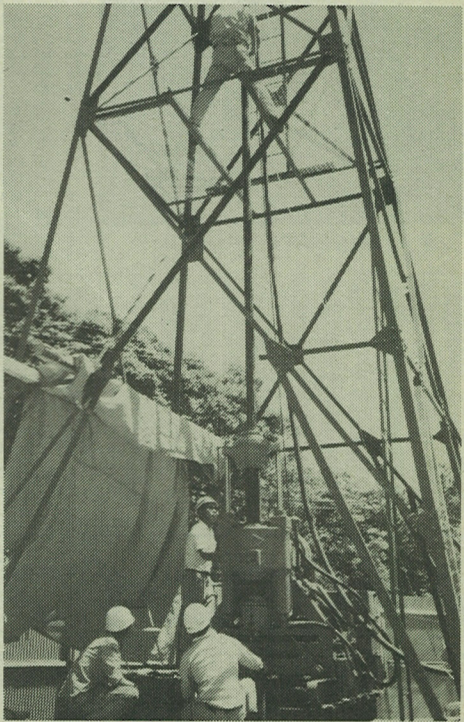
岩石試験センターも充実

八五年は、一月八日から開始した長者原のボーリングで出発しました。吉岐では、事業団がボーリングを開始する以前、深度四百メートルを越すボーリングは、たった一本しか掘削されてい

に貴重なものになってゆくと思われます。それにも吉岐の地層は予想以上に複雑でした。六本中も初期の推定地層とは大きく異なる地層に遭遇しており、お互いの関連性がなかなかつかめない状態でした。今後、これまでのデータを再吟味し、必要がありそうです。

視察で貴重な体験

二月には、建設中の立坑と斜坑の現場視察のため関西へ赴きました。更に一週間後、貫通直前の青函トンネルにも入坑し、巨大な坑内を歩くことができました。世界の海底トンネルだけに、規模の大きさと共に



吉岐ではこれまでに六本のボーリングを実施

に長い歳月をかけて完成させた技術者の苦労が偲ばれ、感慨深いものがありました。建設中の斜坑内は、粉じんと掘削音が渦を巻いていますが迫力があり、新鮮な感動を覚えます。そして切羽に立った時に、削岩機の振動が直接岩肌から伝わり、将来の日韓トンネルの現場に立っているような錯覚に陥りました。これらの現場視

吉岐分会を設立

この頃になるとボーリングはID-04、石田町筒城に移り、資材倉庫の建つ勝本町では、第二期の造成工事が着工になりま

八六年もボーリングから出発しますが、水文調査や確性探査なども計画中です。また岩石コアの力学試験のため、岩石試験センターの充実も計ってゆきたいと考えています。(松村善八所長)

吉岐事務所



圧縮試験機を購入し、コアの力学試験も可能に

科学の統一に関する国際会議

第14回 ICUS

昨年、十一月二十八日から十二月一日まで、会に呼ばれて遠征した国際会議「科学の統一に関する国際会議」(一) ウェイ構想は、八一年の第十回会議で提唱された。主権・国際文化財団(ICC)本部二、たもてあり、科学と価値基準の関係を討議する。ニューヨークが、米テキサス州ヒューストンで、ICUSは、現在、世界をめぐる深刻な諸問題を開かれた。同会議には、四十九国からノベル賞の解決に貢献するものとして大きな期待を受けて、賞受賞者を含む学者三百五十名が参加し、「絶えて、今回は第十四回ICUSの概要を対価値と新文化革命」をテーマに、六つの委員、介する。

価値基準扱う 世界的な会議

ICUSは、世界のあらゆる学問分野の著名な学者・技術者が参加して、全世界の緊急かつ有意義な問題を研究・討議する国際会議である。

「科学者」は、知識の本質を省察して、科学と価値基準の関係を討議する機会を提供することとを目的に、国際文化財団創設者の文鮮明師によって提唱されたもので、七二年のヒューストン

会議を皮切りに毎年開かれて、往々に細分化してゆく現象を、緊急な解決を必要とする世界の諸問題を前にしながら、代科学の危機的状況を克服するために、思考の軸となる価値基準の探求を中心として、これ

テーマが設定され、展開されてきた。未来社会への提言を知られるローマクラブ(本部パリ)の会長で、今回、ICUS副議長を務めたアレキサンダー・キング博士はICUSについて、「多様な専門分野の学者が一堂に会し、グローバルな諸問題に学際的に取り組む、その中で相互の関連を論ずることのできる唯一の世界的会議である」と述べている。

これまでICUSは、今回を含めて世界の十二都市で行われており、延べ五千名の学者・科学者が参加した。また七三年に統一に関する原則を提示することを目指している「N・S・ローレンス」(ICUS副議長)は、

「絶対価値の探求を通じて、文化革命促進に必要な諸知識の統一に関する原則を提示することを目指している」と述べている。

二十九日の開会式では、文鮮明師がICUS提唱者として挨拶に立ち、「我々はICUSファミリーとして、新文化世界の創造という偉大な使命を積極的に担うべきである」と述べ、科学者が、神の愛と真理を中心とする新しい文化革命推進の担い手

として責任を持つべきだと訴え、第一委員会(テーマ・複合システム)における組織化と変化、第二委員会(文化)における統合と相互作用、第三委員会(形式と象徴)行動のルールン、第四委員会(現代化、固有価値および教育)、第五委員会(世界哲学統一への探求)、第六委員会(宇宙とその生成)神話から現実へと、そしてファンタジーへの六つの委員会から構成されており、それぞれ四一五の分科会に分かれて研究発表および討議が行われた。

会議参加者にICUSの感想を聞いてみると、「社会の在り方に関する哲学の価値について、も活発な議論が行われ、とても充実していた。会議は回を重ねるごとに内容が絞られてきている。『絶対価値と新文化革命』というテーマは、我々科学者にとって極めて大切なポイントを示していると思う」(ロイド・モット、コロロンバ大学を教員、手申、李専攻参加十回)満了。この会議の大切な点は、多様な意見から共通項を浮かび上がらせ、モデルとなるような

絶対価値で新文化革命を 価値観統一で理想実現

価値観統一で理想実現

文鮮明師の演説文 抜粋

人類が科学を進展させてきたのは、物質環境の発展にもよりますが、科学の発展は、世界の平和と繁栄を表現しようとする願望です。しかし、科学の専門分野で採られている方法は、当初の期待に合ったものではありませぬ。われわれが科学にもっとも期待したのは、人類の幸福の実現です。科学者が、科学の発展を通じて、人類の幸福を達成する使命を担うべきです。科学者が、科学の発展を通じて、人類の幸福を達成する使命を担うべきです。科学者が、科学の発展を通じて、人類の幸福を達成する使命を担うべきです。

新文化世界の創造 実践する科学者が必要

実践する科学者が必要

私は第一回ICUSが開かれた。科学者が善と希望に満ちた未来社会を築くにあたって、決定的役割を果たすべきだと確信するに至りました。私が過去十四年間、ICUSを支援し、熱心に推進してきたのは、世界の諸問題を解決する素質を持ち合わせておられる学者の方々に、期待を込めて、開拓者としてこの新しい道を歩んでほしいと願っています。今後、ICUSは、高められ、そして責任を担う学者たちが積極的な新文化革命の発展に貢献するよう望みます。

このICUSは、十四回目で、近強調している「新文化革命」の推進です。人類は、今や悪によって最も深刻かつ重大な挑戦を受けています。そのために、本来の理想と幸福を実現する基礎と可能性は、大変な危機にさらされています。

われわれはICUSファミリー(家族)として、新文化世界の創造という偉大な使命を積極的に担い、立ち上がるべきです。新文化世界の創造は、いかなる犠牲を払ってもなされなければなりません。絶対価値の探求は、そのこと自体が有意義ではありませぬ。と、いいますのは、真理であるかにわれわれは目ざまなければならない。

人間の限界を謙虚に認め、神の摂理によりもたらされた歴史の勢いを見失わずに、飛躍を通じて神に「1」になる—こうした理想を成すべきです。神の創造理想のすべては、人間にかけられています。したがって、神のあらゆる関心に人間が、わたしたち自身によって、創造理想が成就します。



ICUS経過一覧表

開催年/開催地	参加国数/参加者数	メインテーマ
第1回 1972/ニューヨーク	8/20	科学の道徳的指向性
第2回 1973/東京	17/60	近代科学と精神的価値
第3回 1974/ロンドン	28/128	科学と絶対的価値
第4回 1975/ニューヨーク	57/340	科学の中心性と絶対的価値
第5回 1976/ワシントン	53/360	絶対的価値の探求—諸科学の調和
第6回 1977/サンフランシスコ	50/400	変化する世界における絶対的価値の探求
第7回 1978/ボストン	60/450	既存の価値の再評価と絶対的価値の探求
第8回 1979/ロスアンゼルス	67/485	絶対的価値の探求における学界の責任
第9回 1980/マイアミ	84/600	絶対的価値と人類平和の探求
第10回 1981/ソウル	109/770	絶対的価値の探求と新世界の創造
第11回 1982/フィラデルフィア	103/520	絶対的価値の探求と新世界の創造
第12回 1983/シカゴ	80/300	絶対的価値と新文化革命
第13回 1984/ワシントン	46/250	絶対的価値と新文化革命
第14回 1985/ヒューストン	40/250	絶対的価値と新文化革命



12月1日のバンケットで表彰を受ける文鮮明師



第14回ICUSの主催者(中央は文鮮明師)